

日本と東南アジア文化との交流

——17世紀日本文学からの視点——

朴 眞 珠

1. はじめに

四方を海に囲まれた日本は、海上ルートから攻め来る外敵の脅威と対峙しながらも、海を自然の盾にして安寧の歴史を歩み続けて来られた。2000年もの間、外国との文化交流を通して栄えてきたのは、島国という地の利に拠るところが大きい。古代における中国王朝との朝貢貿易、そして奈良時代に入ってから推進されていた遣唐使や遣新羅使に付随した貿易集団により、大陸から新しい文物や先進制度がもたらされるようになった。

平安時代後期に台頭した平家一門は、大陸との貿易窓口であった博多を直轄管理下に置いて、博多を起点に、瀬戸内海から大輪田泊（現在の神戸港）にかけての整備を行い、日宋貿易を積極的に推し進めた。王家・貴族をものぐ権力をもって、やがて時代の覇者となっていく平家一門。初の武士政権樹立の下支えになったのが、日宋貿易によって手にした莫大な富である。古代ギリシャの政治家・テμισトクレスが言ったように、「海を制する者は全てを制する」。武士と言えば鎧兜に身を包み、刀を振り回す、そんな戦闘的強さのみが想起されるのだが、まさしくこの平家こそが、海を制すことで一国を支配するほどの栄華を極めた典型的なモデルだといえよう。

日本の海洋貿易は、平家滅亡後も次の政権へと引き継がれていったのだが、その主な貿易相手は中国、朝鮮、琉球王国であった。1543年、ポルトガル人の種子島漂着事件は、日本貿易史における大きな転換点となる。折しも世界は

大航海時代を迎えており、このヨーロッパとのファースト・コンタクトを契機に、日本も世界史の流れに乗ることができたのである。時を同じくして、中国王朝では海禁政策のもと日本との直接貿易を禁じていた。しかし、日本国内での中国文物の需要は依然高いままで、ポルトガル人がアジア貿易の中継的役割を担ったことで、日本は、継続的に中国産のシルクや陶磁器、書物、そして東南アジアの品々を入手することが可能になった。いわゆる南蛮貿易のはじまりである。やや遅れて、スペイン、オランダ、イギリスもこの南蛮貿易に加わり、それぞれフィリピン、インドネシア、香港を拠点にして、日本相手の交易活動を行った。

南蛮貿易で輸入された品々への支払いのため、日本からは大量の金銀が国外へ流出したといわれている。天然資源に乏しい現在の日本からは想像しがたいが、16世紀は「金」、17世紀は「銀」・「銅」と、ともに高い産出量を誇っていた。量もさることながら、その質の高さも注目され、日本の貴金属を求めて世界中の商人たちが押し寄せてきた。南蛮貿易、その後幕府によって展開された朱印船貿易制度により、小さな東方の島国に過ぎなかった日本は、一躍国際貿易国家への仲間入りを果たすのである。

スペイン、ポルトガル人との貿易とともにキリスト教も合わせて伝来した。「靈魂と胡椒」。かの有名なスペイン人宣教師・フランシスコ・ジャビエルが、なぜアジアでの布教活動に熱心なのかという人々の問いに対し「靈魂と胡椒を求めため」と答えたことはよく知られている話である。当時のヨーロッパ諸国は、より広範囲な植民地獲得のため競ってアジアへ進出しており、その枠組みの中でキリスト教会も布教活動に注力していた。イエズス会の宣教師たちは、キリスト教の教理にとどまらず、最先端の科学技術、軍事ノウハウ、医学や法律などの知識を駆使して、九州地方の大名たちを次々とキリスト教へ改宗させることに成功する。

イエズス会は、その財源をポルトガル人とスペイン人が日本での貿易活動で得た利益に頼っていた。これにより幕府は、日本とは異なる思想・宗教観を植え付けられたキリスト教信者の勢力の拡大、そして、不可分に結びついた商業

活動と宗教活動に対し大いなる脅威をおぼえた。

やがて1638年に勃発したキリシタン勢力による「島原の乱」が引金となり、幕府は、日本在住の宣教師集団を追放し、キリスト教信者へ厳しい刑を課すようになった。加えて、日本人（在外日本人を含む）の渡航を制限し、布教活動を行わないことを幕府に誓約したオランダや中国、朝鮮を除き、海外とのあらゆる接触を禁止する政策に乗り出した。以後、1868年までの約250年間、世にいう「鎖国」政策が敷かれることになる。

ここまでが、一般的に理解されている日本の海外貿易史および「鎖国」政策の背景と定義である。本発表では、鎖国が完成した17世紀・元禄時代に活躍した井原西鶴の作品を取り上げながら、共通理解的な「鎖国」の定義とその実態との乖離について述べていきたい。さらに、西鶴の作品を通して、そのルーツが東南アジアと推測される輸入品についても個別に考察を行っていく⁽¹⁾。

2. 鎖国下における四つの貿易ルート

そもそも「鎖国」とはどのように定義付けされるべきであるか。森田氏は、「鎖国」（＝「国際的孤立」）という言葉の成り立ちと流布の背景に、19世紀における「尊皇攘夷」思想が大いに影響していたと述べている。以下、氏による当該記述を引用する。

「それまで三百余りの藩とその集団のリーダー徳川幕府という関係で成り立ってきた個々バラバラの共和国的な政治共同体を、天皇を崇める「日本」という唯一の「国家」として意識させることには成功した。それが明治維新につながったエネルギーの一つであったことは間違いない。ところが、その中の過激な人々は、世界の圧力によって存亡の危機にある小国日本であるが、今日まで日本という国家を守ってきたのは、欧米世界との交流を自ら断って、「鎖国」という歴史を歩み、栄光ある孤立の中で日本独自のすぐれた文化形成を行ってきたおかげだ、という根拠のない自負と幻

想を抱くようになった。それが19世紀になって「鎖国」という語が流行した理由に起因しているのではなからうか。(2)

森田氏も指摘しているように、外国との繋がりを禁止するあらゆる制度の一方で、幕府は「国際文明に立ち後れている日本の国力を十分に把握しており、全政権時代を通して、最新の世界情勢の収集に努力し」、その結果として「海に囲まれた島国という利点を活かした中立外交に踏み切り、世界との文化・経済交流の窓口を四つのルートに絞り、貿易と出入国を管理」していた(3)。

四つの貿易ルートとは、貿易の窓口として幕府の直轄管理下に置かれた四つの藩を指し、インドネシアに「東インド会社」を設立して勢力を広げていたオランダ・中国との貿易が盛んであった「長崎」、対馬藩の宗家が中心となって幕府と朝鮮との中継貿易を行っていた「対馬」、琉球王国を支配下におき、琉球および東南アジアの貿易品を輸入していた「薩摩」、そして、早くから蝦夷地のアイヌとの貿易を主導していた「松前」のことである。

「日本は国際社会の中で無策に孤立を選んだのではなかった」のではなく、四つの貿易ルートという新たなシステムを構築することで、海外との文化・経済交流を継続していったのである。

前出の森田氏が17世紀に焦点を絞り、井原西鶴の作品群を視座に分析するなかで度々指摘しているように、「国際感覚を忘れなかったのは時の政府首脳だけでは」なく、「武士でも公家でも大商人でもなく、市井に住む人々もそうであったはずである」。氏のご指摘通り、この事は西鶴の作品世界にも如実にあらわれているといえる。例えば、『好色一代男』の主人公・世之介にょごがしまが女護島へ旅立つという描写は、海外渡航および大型船建造禁止令を出していた幕府による「鎖国」政策とは矛盾するといえよう。

さらに「東アジア」という広い舞台へ目を転じれば、16世紀から17世紀にかけての中国と朝鮮も、19世紀の西欧諸国到来まで長らく海禁の時代を迎えていた。自由な渡航や貿易を制約していた日本と同様な状況であったといえる。興味深いのは、各々が抱える社会情勢への不満が文学的動機となり、虚構

化した結果ともいうべく、『好色一代男』に類似した孤島・離島への渴望や憧憬をテーマに扱った冒険小説が中朝にも出現していたことである。ひとつは、中国明朝に書かれ、『西遊記』、『三国志演義』、『金瓶梅』とともに中国四大奇書とされる『水滸伝』である。主人公は暴れん坊の盗賊たち。やがて彼らは力を合わせて理想の島・「梁山泊」を築きあげるのである。李氏朝鮮時代に著された義賊・海洋冒険小説の代表作『洪吉童伝』にも、主人公の離島への船出という幕引きが描かれる。『洪吉童伝』は、当時の悪しき政権を嘲笑うかのように、庶民の間で反響を呼び大流行したといわれている⁽⁴⁾。

江戸時代、すでに鎖国が完成した時代に読まれていたとされる怪異小説集『伽婢子』^{おとぎぼうこ}（浅井了意作・1659年刊）にも類似した物語が登場する。以下、『伽婢子』の挿話「伊勢の兵庫仙境に至る」^{いせ ひょうご}のあらすじをあげる。

時は室町時代。伊豆の国に住む「伊勢兵庫頭」という武士は、「昔、伊豆に流された鎮西八郎為朝（源為朝）^{ちんせい はちろう たためとも みなもと の たためとも}が船を漕がせ、鬼の住む島へ辿り着いたといわれるが、それはきっと八丈島であろう、誰か船を出して島の様子を見てきてはくれないか」という主君「伊豆の国主・北条氏康」の命を受け、新たに船を建造し船出した。しかし、海上で強風と荒波に遭い、どことも知れない島へ漂着する。瑠璃や瑪瑙のごとき岩に覆われ、色鮮やかな草木や花が生い茂るその島で、伊勢兵庫頭は、珍しい身なりをした男に出会い「ここは日本国から南三千里離れた滄浪国^{そうろうこく}という所で、観世音菩薩の住む極楽浄土もすぐ近くです」と告げられる。男は、遠路の船旅に疲れていた伊勢兵庫頭を労うため自身の館へ招待した。男の屋敷は豪華な調度と工芸品で飾られ、庭には宝石と見まがうばかりの美しい草木が植えられていた。その国の住人はみな二十歳ぐらいで老人はひとりもない。伊勢兵庫頭は大変に感銘を受け、出来ることならその桃源郷に住み続けたいと願ったが、主君の命令に背くことができず、帰路に就くことを決心する。滄浪国の住人たちは、「馬一頭、鸚鵡一羽」の外、国の名産品を土産にもたせて伊勢兵庫頭を見送るのである。順風に乗って、船は一日足らず

で故郷の伊豆へ帰り着いた。しかし、わずか十日あまりの滞在だったとばかり思っていたのだが、伊勢兵庫頭が帰ってみると主君・北条氏康は既にこの世になく、次の治世へと代替わりしていたのである。

(『伽婢子』原本現代訳(59)をもとに朴訳)

『伽婢子』は、中国の『剪灯新話』に題材をとりながら、登場人物と舞台を鎌倉・室町・戦国時代に置き換えた翻案小説集である。原案のあらすじや作風を多分に踏襲しているため、どちらかといえば中国的な情緒を映し出しているといえる。日本社会の反映度合を論じる事は些かためらわれるが、先ほど述べた、「鎖国」、「海禁」といった東アジア全般に流布されていた制度上の類似性を鑑みれば、この「伊勢兵庫頭」の物語にも人々の抱く理想社会の構築・ユートピアへの希求が現れているのではないかと、想像をたくましくしたくなるのである。

3. 西鶴の作品にみる鎖国下の海外渡航

文豪・井原西鶴のキャリアは俳文学からスタートする。寛永19年(1642年)和歌山県に生れ、同時代に江戸で活躍した松尾芭蕉(1644-1694)とともに若かりし頃より俳人としての才能を発揮し、大阪の文壇に君臨した。41歳の時、俳人から物語作者へと転進を遂げる。『好色一代男』をデビュー作として、亡くなる52歳までのわずか10年の間に、20作(生前に発表されたものが15作で、遺作が5作)の浮世草子を執筆した。男女(又は男性同士)の色恋を描いた「好色物」、主従間の義理や忠心、仇討ちなど武家社会の世界観を描いた「武家物」、色や金に対する欲望、「才覚」(能力)と「仕合せ」(運)によって長者になるというサクセス・ストーリーを盛り込んだ「町人物」、「ここに「珍しい話を雑多に集めたもの」、いわゆる「雑話物」(もしくは説話物)を加えると、ほぼ西鶴の作品は網羅したことになる」⁽⁵⁾。

「一般に、メディアの転換期には新しい才能が活躍する」⁽⁶⁾。17世紀の出版

媒体は写本から版本へと移行しており、西鶴という時代の寵児が生まれた背景には、文学作品と読者とを繋ぐ「メディア」の交替があった。印刷物の「量とスピード」の恩恵を受け、西鶴の作品はより多くの、そして幅広い層の読者を獲得することができたのである。鎖国のイメージとは程遠い自由な発想で描かれた『好色一代男』は大変な人気を博し、版を重ねたといわれている。『好色一代男』における理想郷への航海を含め、後述する外国との貿易の様子を描いたエピソードを散りばめた作品も多数あり、このことから、一般的に理解されている鎖国の定義はますます曖昧なものになってくるといえる。武家・商人・遊女・僧侶・町人など、作中の幅広い登場人物と同様、身分や男女の差を問わず、西鶴の作品に触れることで読者は未知なる国へと思いを馳せ、等身大の主人公たちと一緒に、時には陰しく、時には胸躍る楽しい体験をしたのではないだろうか。

ここで、『本朝二十不孝』所収の挿話「人はしれぬ^{くに}つちほとけ^の土佛」（巻2-3）を取り上げてみたい。

伊勢の国・鳥羽の港に、藤助^{とうすけ}という名の貧しい青年が年老いた両親と暮らしていた。この港には近頃ニワカ分限になった「神部屋^{かんべや}」という人がおり、大船^{しあわせまる}・「仕合丸」を建造し遠く江戸まで商いに出ようというので、藤助もこれに同行しようと決心する。両親は「身過ぎは様々なり。万里の海上^{ゆくこと}を行事、ひとつの命を二つ物がけ、ぜひに思ひとどまれ」と、息子の無謀な航海を必死にとめたが、藤助は一度きりという条件付きで仕合丸に乗り合わせるようになった。残された両親は我が子の無事を神仏に祈願し、翌年の春、息子が無事に帰って来た時には大喜びした。しかし、二度と船には乗らないと親に誓言したにも関わらず、先の船旅の折に恋仲になった女のことが忘れられない藤助は、再び遠洋に出る船に便乗するのである。ところが船は悪天候に遭い見知らぬ島の浅瀬に着く。船から眺めた目の前の陸の光景は世にも恐ろしいものであった。

折^{ふし}節は、中^{あきぞら}の秋空おそろしく、雲^{くも}の村立けるが、日和見^{より}も定^{さだめ}なく、此船^{おき}沖^{おき}に出ると、寅^{ふきくれ}の刻より大風吹暮^{ながさ}、九日^{ひかり}流れ、月の光^{ちうや}に昼夜^{わかち}の差^{やうやう}を漸々

に覚え、夢心ゆめになって行程ゆくほどに、浅瀬あさせに舟底ぞこさはると思ふ時、皆々たまたみ魂たましひを取直ひらきし、目を開ひらてみしに、國里くさの草かたの形かたちは有あし、芦あしの枯かれはの、芭蕉ばせうのごとく成中かこうしちゆうに、二角にかく後ごへ生なる獸けだもの、是こゝぞ水牛すいぎゆうならめ。其外ほか、人形かた有ある羽はねの有物うぶもの、聲こゑはさながら犬いぬにして、壺でう丈余あまみゆ耳みみの長ながき物もの、ひとつもめなれず、物もの冷ひやく、ちかづくに身みをちたゞめける。山やまも里さとも見みる事こと絶たへ、船中せんちゆう卅二人さんにに、男おとこ泣なみにして暮くれぬ。

一同はもはやこれまでかと悲嘆に暮れた。すると急に波が荒くなり、それまで立ち往生していた船が動き出して遠く離れた陸に漂着した。そこは「瀨瀨城せせじょう」という島で、「諸木五色しよきの枝えだを垂たれ、玉敷光たましみひか」理想郷であった。男たちは思わぬ幸運に狂喜乱舞し、夢中になって玉を拾ったが、そこへ神官風の老人が現れ、何も拾わずそのまま立ち去れと諭す。皆はこれを聞き入れ素直に船に戻るのだが、藤助だけが玉拾いに夢中になって乗り損ねてしまう。船はにわかにかいた「神風」のお蔭で島を離れ、無事故郷へ帰り着くことができた。我が息子だけが帰らなかったことを知った藤助の両親は、悲しみに暮れるあまり程なくして死んでしまうのである。

さて、一人島に残された藤助には恐ろしい処遇が待っていた。

彼藤助は、嶋かとうすけに残のこされ有ありりしを、見みなれぬ唐人たうじんあまた来きり、取かこみ 囲かこて連つれ帰かへり、鉄門てつもんの緊きびしき人家じんがに入いりて、銅はしらの柱はしらに、貫くわんとをせし中程ちゆうけいに、逆倒さかさまに釣揚つりあげ、手足てあしの筋すぢをとりて、人油ゆを絞しぼられしは生しょうをかへず、地獄じごくの責せめにあひぬ。よはれば薬くすりを与あたへて、生いけつ殺ころしつ、日数かずふる内に… (中略)

そこは、人間を逆さまにするして油を搾り取るという残酷な刑罰を与える恐ろしい国であった。この藤助の境遇に対する西鶴の批判はいささか厳しいもので、「此藤助が身の難儀は、皆親の言葉を背きし、罰ならんと、おもひやりぬ」と述べている。親の忠告を聞かず、恋心と物欲に打ち勝てない幼稚さに結局罰が下ったという訓戒の物語といえよう。藤助が辿り着いた島は理想郷どころ

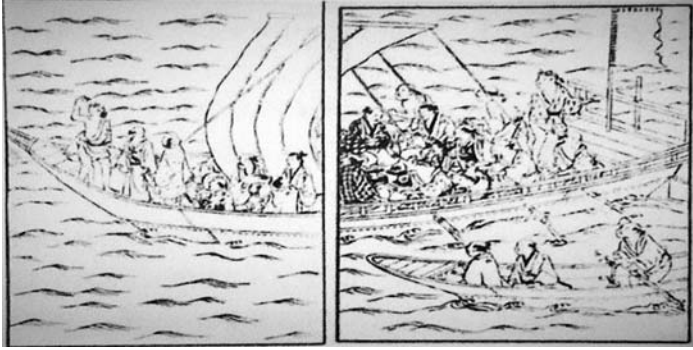


図1 『日本永代蔵』巻1-3 挿絵（井原西鶴集③ 新編日本古典文学全集）

か、人の命をも奪いかねない地獄のような場所だったのであった。

作中、「仕合丸」で江戸まで航海し、かの地での商いで富を得た「にわか分限・神部屋」の登場は注目に値する。当時の幕府は大型船の造船を厳しく取り締まっており、そうすると、「仕合丸」のくだりは実際の世相を反映していないことになるからである。西鶴の作品には、遠洋航海可能で、たくさんの積荷を運ぶことができる大型船に関する記述が多く見られる。さらには大型船に限らず、「船の利便性を高く評価する言葉を随所に散りばめており」、『日本永代蔵』巻1-3「浪風静かに神通丸」では架空の「神通丸」としてではあるが、三千七百石の廻船の活躍を賞賛している。当時の出版禁止令をかいくぐって、このような大船の存在⁷⁾に関する遠慮のない大胆な記述に接し、鎖国下で運用されていた渡航や大型船建造の禁止条例が、果たして世間でどの程度まで浸透し制約の度合いを強めていたか、疑念を持たざるを得ないのである。

次章以降は、西鶴の作品に散見される外国貿易（殊に対・東南アジア）の様相と鎖国の実態との乖離について、『日本永代蔵』、『好色一代女』、『好色一代男』の3作品に描かれているエピソードを取り上げながら述べていきたい。

4. 西鶴の作品にみる日本と東南アジアとの貿易

4-1. 『日本永代蔵』

西鶴の浮世草子の中で「町人物」に分類される『日本永代蔵』（6巻6冊、貞享五（1688）年刊）は、教訓とユーモアを交えて人々が希求する致富道とは何かを説いた短編集である。経済小説の嚆矢としても評価が高く、「今は銀がかねを儲くる時節」（巻5-4）を生きた日本各地の商人・町人たちの姿が生き活きと描かれているのだが、全30話の中には、才覚（能力）と仕合せ（運）で大成功をおさめる人もいれば、一方、始めは金持ちだったが好色や浪費で貧困に陥いてしまう人も登場する。貨幣経済社会における光と闇の両極を実に巧みに描き出しているといえよう。

『日本永代蔵』には、鎖国政策の下、海外貿易に携わっていた商人たちの逸話も多く紹介されている。

「買置きは世の心やすい時」（巻6-3）には、長崎商いによって分限になった商人の話が登場する。鎖国完成後の長崎は、幕府による管理貿易へと限定されてしまうのだが、もともとは平戸を本拠地に、南蛮貿易の中心地として発展した街である。平戸から出島へのオランダ商館移設にともない、中国・オランダ商人は、幕府から与えられた出島市内の特別な居住区画の中で貿易活動を行っていた。よって、鎖国下の日本で、長崎は唯一オランダや中国船が来航できる国際港だったのである。「日本富貴の宝の津」（巻5-1）と称されていたことから分かるように、大陸との貿易に関するノウハウや数々の成功例をもつ長崎の地で商いを行えば、さぞ儲けも大きかったはずである。1672年、長崎では「貨物市法（または「市法貨物仕法）」と呼ばれた入札制度が施行される。金・銀の海外流出拡大を喰いとめるための幕府による苦肉の策ともいえるが、日本人による鑑定で輸入品の価格が決定され、この価格をもとに各地の商人たちが入札を行うことができた。しかしながら、日本人鑑定人制度の導入により、長崎貿易の主導権は一先ず日本側に戻ったものの、その制度のもろさに乗

じた汚職官吏の頻出や中国商人の薄利多売による商品の急激な値下がりやが原因で、金・銀の流出抑止に対してはさほど効力を発揮しなかったと言われている。

一攫千金の幸運をもたらす長崎商いも、入札のための元手が足りなければいかんともし難い。「買置きは世の心やすい時」(巻6-3)に登場する主人公「小刀屋」は、商売の好機を逃さない大変に利口な人物であった。友人から借り入れたお金を元手に、中国産の糸や織物が最安値の時に大量に買置きしたところ、翌年には大幅に値上げし多額の利益を得たのである。

「心を畳込む古筆屏風」(巻4-2)には、対馬(四つの貿易ルートの一つ)を窓口に盛んだった日朝貿易を舞台に、欲に目がくらんだ日本人商人たちの狡猾さと道義違反を嘆いた記述がみえる。

むかし対馬^{しま}行きの^{たばこ}蓆^しとて、ちひさき箱入りにして限りもなく^{はや}時花^りり、
大坂^{おおさか}にてその職人に刻^{きざ}ませけるに、当分知れぬ事とて下^つづみ手ぬきして、
しかも水にしたし^つ遣^ははしけるに、舟^{ふね}わたりのうちにかたまり、煙の種とは
ならざりき。唐人これをふかく恨^{たうじん}み、その次の年、なほ又過ぎつる年の十
くだ倍もあつらへければ、欲に目のあかぬ人、我^{われ}おそろしと取り急ぎ^{くだ}下
しけるに、大分^{だいぶん}湊^{みなと}に積ませ置きて、「去年たばこは水にしめされ思はしから
ず。おのづ^{おのづ}当年は湯か塩につけて見給へ」と、皆々突き返され、自^いから
に朽^くちて、磯^{いそ}の土とはなりぬ。

目方を重くみせるためにタバコを水に浸して売り渡すとは、実に悪質極まりない。西鶴は、「唐人」(中国人または朝鮮人)は絹巻物の奥の品質をごまかしたり、薬種にまやかし物を加えたりせず、常に徹底した品質管理を心掛けており、彼らの商いに対する姿勢は実直で律儀なものであると称賛している。これに対し、目先の利潤ばかりを追求するだけの日本人のモラルのなさに対する「お叱り」は厳しいものであった。

「正直なれば^{しんめい}神明も^{かうべ}頭に宿り、貞廉なれば^{ていれん}仏陀も^{ぶつだ}心を照らす」(同・巻4-2)

という教訓からうかがい知れるように、西鶴は、『日本永代蔵』の全編を通して、お金持ちになるためには運や能力だけではない、謙虚さと正直さを身に着けることも大切であると説いている。

「廻り速きは時計細工」(巻5-1)は、原本の目録の小書きに「長崎にかくれなき思案者」と記されているように、国産金平糖を発明した貧しい長崎町人の逸話が物語の核をなしている。物語の冒頭では、中国で生産される時計というものは当時既に世界中に普及していたが、これは祖父から孫へと三代にわたる血のにじむ努力と工夫の賜物であるとし、彼らの職人精神と利益に無頓着な高潔さを褒め称えている。さらに、「身過かまはぬ唐人の風俗、中々、和朝にてこのまねする人愚なり」とし、なまじ日本人が真似をしてはいけないと戒めてもいる。しかしながら、新しき文物を創りだすためには良きお手本を模倣することが肝心である。

続いて、外国の優れた品々に触発され、根気強く物作りに励んで大金持ちになった男のエピソードが紹介されている。南蛮伝来の金平糖は、以前は高価で市場に出回る量も少なかったのだが、近頃は大変手に入りやすくなり、その背景には長崎に住む一人の日本人の存在があるという。その者は、金平糖の製法を知ろうと中国人商人に聞き回ったが、「よき事は深く秘す」、つまり、いくら率直で律儀な中国人商人であっても、大事な産業秘密を守るべく教えようとしなかったのである。根気強い研究の末、男はついに国産の金平糖作りに成功するのだが、その製法を思いついた経緯が実に興味深い。

胡椒粒にも、沸湯をかけてわたしければ、その木つき見たひともなく、何程か蒔きても生え出る事なし。ある時、高野山にて、何院とかやに、一度に三石蒔かれしに、この内より二本根ざして蔓りて、今世情に多し。

男は、三石(約90 kg)もの胡椒粒を地面に撒いて、わずか二本だけではあるが、栽培に成功したという高野山のとある寺院の噂話を耳にし、金平糖作りにも胡椒粒のような種が肝要であると気づく。思案したあげく、胡麻一粒を種

にし、周りを砂糖で固めて金平糖の形に仕上げることができた。胡麻一升を種にして200斤の金平糖を生産し売ったところ、一年も経たないうちに大金持ちになったという。後に金平糖製法は一般に広まり、どの家でも女性の仕事として普及したので、かの男は菓子屋をやめて、代わりに小間物屋を開き、生来の利発さを発揮してますます裕福になったという。

男が金平糖作りの着想を得た胡椒は、西アジアのインドや東南アジアの国々を主産地とする。日本には8世紀頃中国経由で伝わっており、聖武天皇の遺品が奈良・東大寺に納められた折の献納品目録には、既に「胡椒」という名称での記載が見られる⁽⁸⁾。古くは、身体を温め、臓腑を丈夫にする生薬の一種として使用されていたが、やがて調味料としての需要も高まっていったとみられる。胡椒は、地質や気候の条件を選ぶため栽培が非常に難しく、大航海時代のヨーロッパでは、同量の黄金や牛一頭の価値に等しいほど貴重視されていた。江戸時代において日本で消費された胡椒は、インドネシアに拠点を置いていたオランダ船や中国船により運ばれてきた東南アジア産のもののみみられるが、当時は胡椒の木から摘み取った実をお湯で湯がいたり蒸したりと、加工した状態で日本に引き渡されていた。高野山の何某が胡椒粒（種）から発芽させて栽培に成功したかどうか、その真偽のほどはさておき、そもそも胡椒の原木を見たこともない日本人が、胡椒粒を植物の種であると合点し、東南アジアとは異なる土壌の日本で栽培に挑んだことじたい非常に興味深い。「身過かまはぬ唐人の風俗、中々、和朝にてこのまねする人愚なり」と、日本人は中国人の職人精神と高潔さには到底及ばず、無碍に真似するものではないと戒めていたこととは逆説的な考え方だが、損得勘定には興味がないうえ風雅を好む中国人は、ある意味商売の世界には向かず、その点、独自の物作りを目指して奔走した金平糖発明の男の例に現れているように、商売の才覚という面では日本人の方が上手であると評価しているのかもしれない。金平糖の国産化、その発明のもととなった胡椒栽培のエピソードに接して思うのだが、メイド・イン・ジャパンの名のもと世界中に日本製品を輸出し、高度成長を遂げていく終戦後の日本を、西鶴はこの頃すでに予知していたのかもしれない。

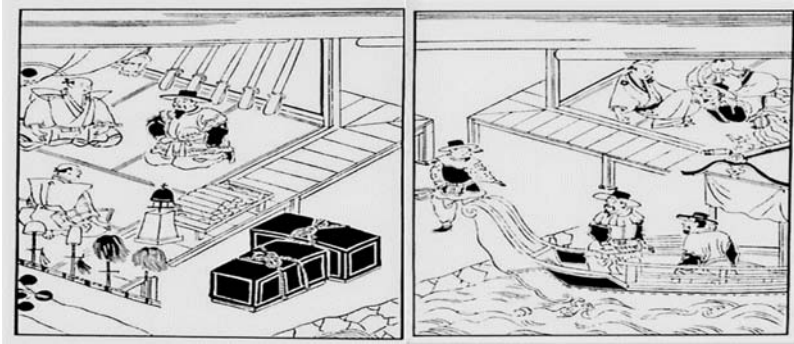


図2 『日本永代蔵』巻5-1 挿絵（井原西鶴集③ 新編日本古典文学全集）

さて、物語は、金平糖製造からその発明者の住む国際都市・長崎の繁栄ぶりへと展開していく。

「日本富貴の宝の津」という呼び名にふさわしく、長崎には多くの外国船が入港し、「生糸・絹織物・薬品・鮫皮・伽羅・諸道具」などの品々が取引されていた。それらの入札額は年々高騰し、それでも悉く落札されていった。さらには「神鳴の犢鼻褌^{かみなり ふんどし}、鬼の角細工^{おに つのざいく}」など、ありとあらゆる珍品を手に入れることができ、世界の広いことが思い知れる場所であった。

挿絵（図2）に描かれている異国の船や外国商人や商談に興じる人々の様子からも、長崎がいかに広く、世界に開かれた国際色豊かな街であったか知ることができる。

長崎には、多種多様な舶来品を買い求めて京・大阪・堺など、全国各地から商人達が集まってきたという。鎖国下にあっても、異国の品々に対する国内の需要は高まる一方で、これに呼応して外国貿易は依然として盛んであった。貿易による需要と供給の好循環が、江戸時代の経済成長に大きく寄与していたことは容易に想像できよう。なお、「神鳴の犢鼻褌、鬼の角細工」がどのような品物であったか判然としないが、日本固有のものでない珍品の例えであることは確かである。物語の最後には、投機目的で取引された「竜の子^{りょう}」（東南アジア産のオオトカゲ）や「火喰鳥^{ひくひどり}」（東南アジア産の駝鳥科の鳥）といった珍しい

動物も登場する。堅実で生産的な商いが奨励されるべきところ、中には、こうした外来種の珍奇な生き物で金を稼ぐ見世物小屋などの商売に手を出す人たちもあり、西鶴は、これを「大切な国費の浪費」であると嘆いているのである。

4.2. 『好色五人女』

『好色五人女』にも、「竜の子」・「火喰鳥」のごとき、東南アジアが輸入元とみられる風変わりな貿易品が登場する。以下、紹介していきたい。

『好色五人女』（5巻5冊、貞享三（1686）年刊）は、西鶴の作品群では「好色物」に分類され、西鶴が生きた時代に起きた有名な恋愛事件における、5人の女の恋愛人生を描いた5つの物語から成り、男尊女卑思想が濃厚であった当時の社会にあって、掟や常識に囚われず、命がけで恋路を全うした生身の女たちが巧みな筆致で描かれている。「お夏清十郎」（巻1）、「樽屋おせん」（巻2）、「おさん茂右衛門」（巻3）、「八百屋お七」（巻4）の主人公たちは、全員許されざる恋に身をやつし結局は法に裁かれて死んでいく。ところが、「おまん源五兵衛」（巻5）だけが、恋が成就して巨万の富まで手にするというハッピーエンドを迎えるのである。これは、「当時の演劇形式」に倣い、最終章だけを「めでた話の祝言形式で終わる必要があった」からであるとされる⁹⁾。

巻5の主人公「おまん」は、薩摩の武士・源五兵衛の男盛り・美男子ぶりに惚れ込み、恋文を送るなどして積極的に誘いかけてみるものの、源五兵衛が男色を好む「衆道」であったため、始めは全く相手にもされなかった。何とか源五兵衛を振り向かせられないものかと思案を重ねた「おまん」は、一計を案じて、男装姿で源五兵衛の住処に忍び込み、紆余曲折の末思いを遂げることができた。もともと「おまん」は「琉球屋」の屋号を持つ貿易商の娘であり、その後一緒になった二人は、彼女の実家の家業と莫大な財産をも受け継ぐことになる。挿絵（図3）には、金・銀財宝が詰まった箱とともに、人魚など珍奇な品々が収まっている庭蔵の様子が描かれている。

薩摩藩は、鎖国政策のもとで幕府が直接管理していた四つの貿易ルートのひ



図3 『好色五代女』巻5「おまん源五兵衛物語」挿絵
(井原西鶴集① 新編日本古典文学全集)

とつであり、琉球王国原産の砂糖や珊瑚、さらに琉球王国を中継地にして東南アジアの品々を輸入していた。物語の舞台が薩摩藩であり、屋号が「琉球屋」であることから想起されるように、「おまん」の実家の財宝はこの対・琉球貿易によって得たものであろう。

庭蔵みれば、元渡りの唐織山をなし、伽羅掛木のごとし。さんごじゅ
は、一匁五分から百三十目までの無疵の玉千二百三十五、柄鮫、青磁の道
具かぎりもなく、飛鳥川の茶入れ、かやうの類ごろつきて、めげるをかま
はず。人魚の塩引、めなうの手桶、かんたんの米かち杵、浦島が包丁箱、
弁財天の前巾着、福祿寿の剃刀、多門天の枕 鐘、大黒殿の千石どほし、
えびす殿の小遣帳、覚えがたし。世にある程度の万宝。ない物はなし。

伽羅、唐織物、珊瑚珠、柄鮫（刀の柄に巻く鮫皮）、青磁の道具などは、みな日本国内では入手困難な舶来品で、そのような財宝が蔵の中に山積みになって納められているとは、大変な繁栄ぶりといえる。

伽羅（「沈香」ともいう）とは、東南アジアを原産とする香木のことである。

16世紀末から17世紀初頭にかけて江戸幕府が運用していた東南アジアとの朱印船貿易が始まった契機も、この伽羅を大量入手するためであったとされる。

仏教儀式の焼香で多用されていた外、「香道」に代表される「薫り」の文化をこよなく愛する日本人にとって、伽羅はなくてはならないものだったのである。

さて、「人魚の塩引」や「瑪瑙の手桶」などの耳慣れない品々は、いずれも実在するものではない。これに対し現在の学会では、「世の珍品・宝物に対する西鶴の俳諧的趣向」であるというのが通説となっている。いわずもがなだが、人魚は想像上の生き物である。しかしながら、敢えて「人魚の塩引」と記し、挿絵にも上半身は人間・下半身は魚の姿の「人魚」を描いているのには甚だ興味をおぼえるのである。

鎖国や海外貿易というテーマから少々逸脱してしまうが、ここからは、この「人魚」の正体について考察していきたい。本来ならば、しかるべき文献をもとに綿密に検証を行ったうえ論述すべきであるが、本発表では、人魚を登場させた日本と朝鮮における口承文学や説話を参考にして、私見を述べるにとどめる。

「琉球屋」の庭蔵に置かれた人魚の正体について、二つの可能性があるのではと考えている。一つは延命長寿の薬効をもつ動物性生薬である。福音県小浜市に伝わる「八百比丘尼^{やおびくに}」伝説には、人魚の肉を食べて不老不死となった女性の話が登場する。

若狭の国に住むある男が、ひよんな出来事から竜宮城に招かれたことになる。男は、大変なご馳走に預かり、その上「人魚の肉」をお土産にもらって竜宮城を後にした。男には娘が一人いたが、「人魚の肉」の放つ芳しい匂いに我慢できなかった彼女は、父親に黙ってそれを食べてしまったのである。「人魚の肉」のお蔭で娘は不老不死の命を得て、いつまでも若くて美しいままでいられたという。しかし800歳迎えた時、一人孤独に生きることに堪えかねて、故郷へ帰って比丘尼になり、永遠の命を捨てるのであった。

朝鮮にも「八百比丘尼」と非常に類似した話が伝わっている。平讓（現在の

北朝鮮)の大同江に^{テドンガン}「李鏡殊」という貧しい漁夫が住んでいた。ある日、李鏡殊が川辺で釣りをしていたところ、水面が二つに分かれ、川底から美女たちが現れて李鏡殊を竜宮城へ連れていった。竜宮城で盛大なもてなしを受けた彼は、朝鮮人参の形をした人魚の肉を土産に持たされて家に帰って来るのであるが、「浪奸」という名の娘が父親に無断で人魚の肉を食べてしまい、不老不死の身となるのであった。浪奸はその後、「平讓」随一の妓生として名を馳せ、その美貌を武器に3000人も男性たちと関係を持った。しかし120歳になった頃、自身の淫らな行いを悔い改めて比丘尼となり、300歳の時には入滅したのである。「八百比丘尼」と「浪奸」の二つの伝説は、物語の舞台や二人の女性が不老不死を捨てた年齢こそ違うものの、酷似しているといえよう。余談であるが、「浪奸」はどうやら実在していた女性がモデルになったようである。

正確な生没年は不明だが、18世紀末から19世紀初頭にかけて平讓の地に生き、美貌と詩文・絵画の才能を兼ね備えていた名妓「竹香」が、この「浪奸」伝説のモデルになったとされている。「竹香」は字名を「浪奸」と名乗っており、現存する詩集に「竹香」または「浪奸」という名で記した数編の詩歌を残している。

日韓に伝わる二つの人魚伝説の内容が指し示しているように、日本と韓国では人魚の肉を食すと不老不死になると信じられていたと推測できるのだが、あくまでも想像の域を出ない。なお、人魚の存在が信じられてきた背景には、姿形が人魚と似ているとされる海洋性哺乳類の「ジュゴン」の存在が度々指摘されている。当然ながら、生物学的見地からは全く根拠がないものとし否定されている。恐らく、海面に漂いながら我が子を愛おしそうに胸に抱いてあやしている姿が、人間の女性を彷彿させることに端を発しているのであろう。

「ジュゴン」は、主にインド洋・南太平洋に生息し、日本でも九州南端、沖縄の近海で頻繁に目撃されていた。さらに、縄文時代の遺跡からジュゴンの骨や歯の化石が発見されており、江戸時代にも、東南アジアおよび沖縄近海で捕獲されたジュゴンが日本に輸入されていた。問題はその用途である。もし「おまん源五兵衛物語」における「人魚の塩引」をジュゴンの存在と断定できるの

であれば、それは単なる食用（食料）としてではなく、古来より信じられてきた「人魚の肉を食せば不老不死となる」という伝説が普遍化され、そのまま「若さ」と「長寿」の薬効と結び付き、後々貴重な生薬として取引されていたと考える方が妥当であるといえよう。

「琉球屋」における「人魚の塩引」とは何を指すのか、もう一つは、鯨油のような上質な油を搾取するために捕獲された何らかの魚類であった可能性である。残念ながら、現時点では文献調査が足りず、日本における人魚と、その「油の搾取」を結びつける学説もしくは伝説の類を見つけることが出来ない。しかしながら、17世紀前半の李氏朝鮮時代に著された朝鮮文学史上初の野談・説話集『於于野談』に、以下のような物語が所収されている。

江原道・^{ソブツク}歙谷の懸令（地方長官）職にあった「金」何某は、ある日、村の長者が海で人魚を捕らえて館の庭の池で飼っているという噂を耳にする。自身の目で確かめたくなくなった懸令はさっそく長者のもとへと出かけた。噂どおり、庭の池には下半身は魚の形をし、腰から上は人間の姿と同じで、まるで14~5歳の女の子のようにあどけなく、人間の言葉を話す人魚が泳いでいた。涙を流しながら苦しむ人魚に同情した懸令は、長者に人魚を海に戻すよう命じたが、長者は「人魚からは鯨油を遥かに上回る上質な油が搾れる」ため逃すことは出来ないと、首を縦に振らなかった。しかし、懸令に根強い説得を聞き入れて、結局人魚を海に帰すのであった。

世界中で重用されてきた鯨油の用途に照らして推測するに、『於于野談』に描かれた人魚から搾れる油とは、灯籠や灯台に用いられる灯火油、そして石鹼、火薬、食用油、化粧品などの原料ではなかったのかと考えられる。

延命長寿をもたらす「生薬」か、それとも身から搾れる「油」か、単なる「文学的比喩」か、そのいずれにしても、「琉球屋」に描かれている「人魚の塩引」は日本国内では入手不可能な珍品（あるいはその喩え）であることに変わりはなく、仮に、江戸時代の日本が言葉とおりの「鎖国」を行い外国との貿易

を中断していたならば、恐らく目にすることが出来なかった記述だったのでないだろうか。

西鶴の作品には、この「人魚の塩引」や、「神鳴の犢鼻褌、鬼の角細工」(「廻り遠きは時計細工」(巻5-1))のように、その定義や由来を特定するのが難しい品物の名前が多く登場するが、紙幅の制約があるため別の機会に考察を行うこととする。

『好色五人女』に描かれている東南アジア由来の珍奇な品々に関連し、以下、東南アジア産のスパイスについても述べていきたい。

4-3. 『好色一代男』

井原西鶴が著した初の浮世草子で、言わずと知れた風俗小説の名作・『好色一代男』(天和二(1682)年刊)をもって、本発表の最後をしめくりたい。

本作の主人公「世之介」が、7歳の時に初めて性に目覚めて以来、一生涯にわたり関係を結んだ女性は3742人、男性は725人にもものぼる。生身の人間が体現するにはリアリティに欠ける数字とも思えるが、「単なる女性遍歴の羅列ではなく、日本の古典の名著『源氏物語』『伊勢物語』のパロディー」⁽¹⁰⁾として、恋愛・性愛への賛歌を比喻化したものと解釈すれば、納得がいくのである。物語の最後、齢60を迎えた世之介は、女性だけが住むと云われる理想郷・「女護島」への船出を決心する。「現在なら何気ない世之介の最期であるが、理想郷を探して日本から船で世界の海に旅立つという結末は渡航禁止の鎖国の時代に許されない発想である」⁽¹¹⁾。第2章においても述べたように、鎖国、そして同時期中の朝における海禁政策のもと出現した東アジア文学に通底する「孤島・離島への希求」と照らし合わせれば、本作はやや“大人向け”の海洋冒険小説として享受されてしかるべきである。実際に、主人公の恋愛遍歴の誇張的描写もさることながら、後述する「女護島」への船出の様子など、当時の性風俗(あるいは西鶴個人の性愛に対する思想)の奔放さ・過激さにも関わらず、本作は大変な反響をもって大衆に受け入れられた。「鎖国の定義からは御法度破りにあたるはずの『好色一代男』が政府の取り締まりにあわなかったと

いう、この事実一つだけでも「鎖国」の幻想性が窺われる」のである⁽¹²⁾。

以下、世之介の船出の様子を描いた記述を引用する。

それより世之介は、ひとつこころの友を七人^{さそひ}誘引あはせ、難波江^{なにはえ}の小島^{こじま}
にて新しき船つくらせて、好色丸^{よしいろまる}と名を記し、緋縮緬^{ひぢりめん}の吹貫^{ふきぬき}、これは、む
かしの太夫吉野^{よしの}が名残^{なごり}の脚布^{きやふ}なり。幔幕^{まんまく}は、過ぎにし女郎^{まんま}より念記^{かたみ}の着物^{きるもの}
をぬひ継がせて懸けならべ、床敷^{とこじき}のうちには、太夫品定め^{たいふ}のこしばり、
大綱^{おほづな}に女の髪すぢをよりませ、さて台所^{いけふね}には、生舟^{ぢちやう}に鯨^{ごぼう}をはなち、牛房^{うまのいも}・
薯蕷^{みどこ}・卵^{ちわうぐわん}をいけさせ、檣床^{つぼ}の下には地^に黄丸^{よきたん}五十壺^{いそ}・女喜丹^{にょきたん}二十箱^{にじゅう}・りん
の玉三百五十^{たま}・阿蘭陀^{あらん}糸七千すぢ^{いと}・生海鼠^{なまこね}輪^{なまこね}六百懸^か・水牛^{すいごう}の姿二千五百^{すいごう}・
錫^{すず}の姿三千五百^か・革^{かわ}の姿八百^{まくら}・枕^{いせもの}絵二百札^{いせもの}・伊勢物^{いせもの}がたり二百部^{ふんどし}・犢鼻^{ふんどし}褌^し
百筋^{すぢ}・のべ鼻紙^{しひやくたい}九百丸^{なまこね}、「まだ忘れた」と、丁子^{ちやうじ}の油^{あぶら}を二百樽^{たる}・山椒^{さんせう}薬^{ぐすり}を
四百袋^{しひやくたい}・葱^{しひやくたい}のこづちの根^ねを千本^{みづがね}・水銀^{わたがね}・綿実^{たう}・唐^こがらしの粉^こ・牛膠^{ごしつ}百斤^{きん}、
その外色々品々^{ほかいろいろしなじな}の責道具^{せめだうぐ}をととのへ、さて又男^{うぶ}のたしなみ衣装^{うぶぎ}、産着^{うぶぎ}も数
をこしらへ… (中略)

世之介とその仲間がこしらえた船・「好色丸」には、催淫剤や秘薬、性具と
いったありとあらゆる淫らな品々が積み込まれる。その外、風向きを知るため
の「吹貫」には太夫吉野の肌着を用い、船を停泊させるのに用いた「大綱」に
は女性の髪を編み込ませるといふ、まさに性愛に生涯を懸けた世之介ならではの
徹底ぶりである。日本を離れ、伝説の島「女護島」目指して旅立った世之介
一行のその後の顛末については、読者の想像に委ねられたまま幕引きとなるの
である。

「好色丸」の積荷の描写は、さながら当時の性風俗を陳列したショー・ウィ
ンドーのようである。ここで注目したいのは、女喜丹などとともに挙げられて
いる「丁子の油」であるが、その名の通り、「丁子の油」の原料となるのは東
南アジア由来のスパイス「丁子」(clove)である。鎖国時代の当時は、恐らく
オランダや中国商人によって東南アジアからもたらされたのであろう。以下、

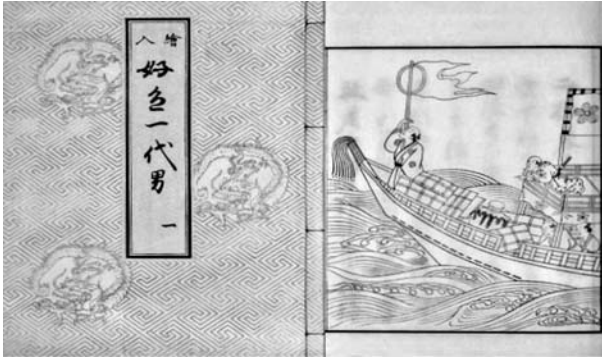


図4 『好色一代男』挿絵（井原西鶴集① 新編日本古典文学全集）

遙々南洋の島から日本に伝来され、性愛小説のユーモアラスな一場面を飾ることになった「丁子」の用途や需要の度合について述べることにする。

第2章において、スパイスのひとつである胡椒にまつわるエピソードを紹介した（「廻り遠きは時計細工」（巻5-1））。スパイスの類は、既に奈良時代には中国を経由して伝わってきており、日本でも一定の需要があったとみられる。

「丁子」は、インドネシアの奥地のモルッカ諸島に生息するスパイスの一種で、胡椒や肉桂と同様、世界中の食卓で肉や魚の臭みを消すための香辛料として多用されてきた。しかしながら、肉食を好むヨーロッパや中国、中東アジア諸国に比べ、日本におけるスパイスの消費量は遥かに少なかったと推測される。日本は殺生禁断の仏教の戒律を重んじて、近代に至るまで肉食を敬遠していたからである。一方で、「丁子」には生薬としての薬効もあり、心身の疲れを癒し、さらには「魔をさけ福と寿を与える」薬物の原料として重要視されてきた⁽¹³⁾。胡椒と同じく、日本における「丁子」の使用の歴史は長い。

「正倉院の薬物中に丁子があるが、薬用あるいは防腐・防黴剤として、それから丁子を漆に塗りこめた器用調度品」が存在する。これは、当時最先端の工芸文化を誇っていた中国・唐朝のものに倣ったのではないかとみられている⁽¹⁴⁾。

「丁子」は、甘くて焦げ付くような独特な香りをもつ。それゆえに化粧料の香料として長い間人々に愛されてきた。現在は相撲の力士が鬘を結い上げる「床山」位しか需要がないのだが、江戸・元禄時代には男も女もみな髪を結っており、髪を整えるとともに髪型を保持するために使った化粧料が鬘付け油である。この鬘付け油のおおまかな製法だが、菜種油や椿油などの植物油と木蝋に、様々な香料を混ぜて固めて仕上げる。その際、配合される香料の種類と目方によって値段が決まる。丁子、白檀、竜腦、麝香など、舶来の貴重な香料を混合すればおのずと値が張るのである。「丁子」をふんだんに配合した「伽羅の油（きゃらのあぶら）」に代表される高級品などは、愛欲と見栄が呼び合う遊郭で多く消費されていた模様である⁽¹⁵⁾。

さて、一般的に、『好色一代男』に登場する「丁子の油」は媚薬・催淫剤（aphrodisiac）の部類であると解釈されている。「丁子」の放つ甘美でエキゾチックな香りゆえ、媚薬・催淫剤の香料のひとつとしても古くから重宝されていた⁽¹⁶⁾。科学的見地からいえば、口から味覚を通じて感じることより、鼻から頭（神経）へ刺激を伝達する方が、より直接的に肉体・精神の両方へ作用する⁽¹⁷⁾。「丁子」の主成分である「オイゲノール[eugenol]」は、精神系統に刺激を与え、精神安定と性欲を催す効果があるとされている⁽¹⁸⁾。生理上の病を癒し、肉体に強い生命力（vitality）を与えることで延命長寿を可能にするとともに、さらには「相手方にいとも艶めかしい訴え、性的な衝動を強くする」⁽¹⁹⁾。これつまり媚薬のもつ本領である。男の心をかき立て、女を吸い寄せる丁子の油を女護島へ向かう船荷のひとつにあげているのは、もっとものことであるといえよう。

5. まとめに代えて

17世紀、強大な軍事力・経済力を有する西欧諸国が掲げていたアジア植民地政策は、日本にとっても大きな脅威となっていた。「鎖国」は、こうした国際情勢のもと、日本が自国を護ろうと対外向けに発信した防衛政策に過ぎなか

った。事実鎖国政策下の日本は、四つの貿易港を通じて世界に開かれ、貿易による経済利益と高度な国際文化を継続して享受していったのである。

本発表では、西鶴文学を通して、そうした鎖国下日本における貿易の諸相・東南アジア由来の輸入品について述べて来た。

江戸時代、琉球王国経由で伝来された三味線の反響としては、東南アジアで採取・加工した蛇の皮が使われていた。「蛇皮」を用いた三味線の音色は大変美しく、「浄瑠璃」太夫の「語り」をよりドラマチックに彩る伴奏楽器として重用されていたとされる。元禄時代に花開いた演劇「人形浄瑠璃」を語る際、この「蛇皮の三味線」の存在は欠かせないのである。

「文化（文学）からモノ」を紐解く視点から、「モノから文化（文学）」への影響を探る。将来的には、日本伝統芸能におけるこの三味線の役割のように、東南アジアとの交流により伝来された「モノ」が日本「文化」の形成と発展に与えた影響という視点で論攷を試みていきたいと考えている。

注

- (1) 本稿は2019年3月にインドネシア・ジャカルタで開かれた「International forum on Spice Route; Reviving the world's maritime culture through Spice Route as world common heritage」にて口頭発表した「Japan maritime trade under Isolationist foreign policy in 17th century -From the view of Japanese literature-」に基づいている（原文は英語）。
- (2) 森田雅也「鎖国下日本と世界に繋がる海の交易ルート－西鶴文学を視座として－」
- (3) 森田(2)に同じ
- (4) 染谷智幸「西鶴と東アジアの海洋冒険小説－宋江・李俊の梁山泊、洪吉童の律島、世之介・世伝の女護島－」
- (5) 水上雄亮「西鶴浮世草子の魅力」
- (6) 中嶋隆「総論 メディアの時代を駆けた西鶴－俳諧から「好色物」浮世草子へ－」
- (7) 森田(2)に同じ
- (8) 山田憲太郎『スパイスの歴史－薬味から香辛料へ－』
- (9) 森田(2)に同じ
- (10) 森田(2)に同じ
- (11) 森田(2)に同じ
- (12) 森田(2)に同じ

- (13) 山田(8)に同じ
- (14) 山田(8)に同じ
- (15) 山田(8)に同じ
- (16) 山田(8)に同じ
- (17) 山田(8)に同じ
- (18) 山田(8)に同じ
- (19) 山田(8)に同じ

参考文献

- ①森田雅也「鎖国下日本と世界に繋がる海の交易ルート－西鶴文学を視座として－」『人文論究』（2018年・67-4）関西学院大学人文学会
- ②荒野泰典『海禁と鎖国』東京大学出版会 1992年
- ③中嶋 隆「総論 メディアの時代を駆けた西鶴－俳諧から「好色物」浮世草子へ－」
- ④染谷智幸「西鶴と東アジアの海洋冒険小説－宋江・李俊の梁山泊、洪吉童の律島、世之介・世伝の女護島－」
- ⑤六渡佳織「西鶴本と出版メディア」
- ⑥水上雄亮「西鶴浮世草子の魅力」
- ⑦山田憲太郎『スパイスの歴史－薬味から香辛料へ－』法政大学出版局 1979年
- ⑧今岡謙太郎『日本古典芸能史』武蔵野美術大学出版局 2008年

※③～⑥：『井原西鶴』「21世紀日本文学ガイドブック④」中嶋隆編 ひつじ書房 2012年 所収

※西鶴作品の原文引用：『新編日本古典文学全集 井原西鶴集』①、③（小学館）

※『伽婢子』の挿話「伊勢の兵庫仙境に至る」は、『伽婢子 原本現代訳（59）』（教育者新書）を参考に口語訳した。